甲田南遺跡

- 一般国道(旧)170号線歩道設置工事に伴う発掘調査 -

大阪府教育委員会

甲田南遺跡

- 一般国道(旧)170号線歩道設置工事に伴う発掘調査 -

大阪府教育委員会



土坑04出土の磨製石剣



土坑02出土の南河内型同心円文塼

序 文

甲田南遺跡は、富田林市甲田に所在する弥生時代から中世にいたる複合遺跡です。なかでも、弥生時代の遺構・遺物が多数発見されており、南河内を代表する弥生集落として知られています。

昭和55年、大阪府教育委員会による、国道309号の建設に先立つ発掘調査で、弥生時代の 竪穴住居や方形周溝墓が見つかり、弥生集落の中心部分の様子が明らかになりました。その 後も周辺の開発に先立つ発掘調査によって、集落の全体像が徐々に明らかになりつつありま す。

それら既往の調査成果によると、今回の調査地は、集落周辺部で遺構が希薄な区域とされてきました。しかし今回、土器棺や複数の土坑などが発見されたことは予想外のことで、弥生集落の全体像を明らかにする上で、非常に重要な調査成果を提供することになりました。

他にも府内では珍しいカマドを造り付けた古代の「竪穴住居」、鉄鎌を副葬する「中世墓」 が見つかり、また古代寺院に使用されるような煉瓦の一種である「塼(せん)」も出土しました。 これらは弥生時代以降の甲田南遺跡を解明する上で貴重な資料となるものです。

最後に、発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆様、ならびに関係機関に深く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年3月

大阪府教育委員会事務局 文化財保護課長 野口 雅昭

- 1. 本書は、一般国道(旧)170号線歩道設置工事に伴い実施した富田林市甲田3丁目に所在する甲田南遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 本調査は、大阪府都市整備部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した。
- 3. 現地調査は、調査第二グループ副主査 山田隆一を担当者として、平成21年度に実施した。 また、整理作業は平成22年度に、調査管理グループ主査 三宅正浩、副主査 藤田道子を担 当者として実施した。
- 4. 本調査の調査番号は、「09014 である。
- 5. 調査の写真測量は、株式会社アコードに委託した。撮影フィルムは、同社で保管している。
- 6. 出土した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
- 7. 発掘調査および整理作業にあたっては、地元自治会、富田林市教育委員会、大阪府富田林土 木事務所の御協力を得た。
- 8. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
- 9. 本書の執筆・編集は山田が行った。
- 10. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した経費は、大阪府都市整備部が負担した。
- 11. 本書は300部作成し、一冊あたりの単価は777円である。

凡. 例

- 1. 本書に用いた標高は、東京湾標準潮位(T. P. 値)による。座標値は、世界測地系平面直 角座標第VI系によるもので、方位は座標北を示す。
- 2. 土層の記載に用いた色調は、『新版 標準土色帖 (23版)』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修) 2001. 1によった。

本 文 目 次

本文目と	
序	ζ
例言	
凡	
第1章	調査にいたる経緯と経過
第1負	节 調査にいたる経緯⋯⋯⋯⋯⋯⋯1
第2頁	6 調査の経過と方法
第2章	位置と環境
第3章	調査成果
第1頁	节 層序
第2頁	6 遺構と遺物⋯⋯⋯⋯⋯⋯10
第4章	まとめ25
	挿 図 目 次
第1図	調査地位置図
第2図	調査区位置図
第3図	周辺の遺跡分布図
第4図	遺構面平面図 \cdots 5 \sim 6
第5図	東壁土層断面図 7 ~ 8
第6図	中世墓01平面・断面図、および出土遺物実測図11
第7図	9 · 10区遺構平面図
第8図	9 · 10区出土遺物実測図12
第9図	土坑02平面・断面図13
第10図	土坑02出土遺物実測図13
第11図	竪穴建物01平面・断面図14
第12図	竪穴建物02平面・断面図15
第13図	竪穴建物02のカマド平面・断面図15
第14図	竪穴住居02出土遺物実測図15
第15図	自然流路01出土遺物実測図16

第16図	土器棺01平面・断面図	…17
第17図	土器棺01実測図	…18
第18図	5 区遺構平面・断面図	…19
第19図	溝02出土遺物実測図	…19
第20図	6 ・ 7 区遺構平面・断面図	20
第21図	土坑05出土遺物実測図	21
第22図	12区ピット群平面・断面図	…22
第23図	土坑04および包含層他出土石器実測図	…23
第24図	その他の出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24

図 版 目 次

巻頭図版		上. 土坑04出土の磨製石剣
		下.土坑02出土の南河内型同心円文塼
図版 1	調査区遠景	上. 北東上空からみた調査区
		下. 南上空からみた調査区
図版 2	東壁断面	上. 調査区北端部
		中. 調査区中央部
		下. 調査区南端部
図版 3	中世墓01	上. 検出状況 (西から)
		中.掘削状況(西から)
		下 墓坑内北東部の遺物出土状況(北西から)
図版 4	中世遺構	上.9・10区溝・ピット群(南西から)
		中. 土坑02 (南から)
		下.土坑02の塼出土状況(西から)
図版 5	竪穴建物 1	上. 竪穴建物01の掘削状況(南西から)
		中.竪穴建物02のカマド検出状況(西から)
		下.竪穴建物02のカマド検出状況(北西から)
図版 6	竪穴建物 2	上. カマドの掘削状況1(西から)
		中.カマドの掘削状況 2 (西から)
		下. カマドの掘削状況 3 (西から)
図版 7	竪穴建物 3	上.竪穴建物01・02全景(北西から)

- 中. 周溝とカマドの関係1 (南から)
- 下. 周溝とカマドの関係2(北から)
- 図版 8 土器棺01 上. 掘削状況 1 (南から)
 - 中. 掘削状況 2 (南から)
 - 下. 墓坑の掘削状況 (南から)
- 図版 9 弥生遺構 1 上. 6・7区の遺構 1 (北東から)
 - 中. 6・7区の遺構2 (南西から)
 - 下. 土坑05の掘削状況 (西から)
- 図版10 弥生遺構 2 上. 落込み01の焼土検出状況(南東から)
 - 中. 落込み01の焼土掘削状況(南東から)
 - 下 土坑12の掘削状況(西から)
- 図版11 弥生遺構 3 上. 土坑04掘削状況(西から)
 - 中. 土坑16掘削状況(西から)
 - 下. 12区ピット群(東から)
- 図版12 出土遺物1 竪穴建物02、溝02、中世墓01(1)
- 図版13 出土遺物 2 上. 中世墓01 (2)
 - 下. 9・10区ピット群、土坑02
- 図版14 出土遺物 3 上、土坑02出土塼 a 面
 - 下. 土坑02出土塼 b 面
- 図版15 出土遺物 4 上. 土器棺01蓋
 - 下. 土器棺01身
- 図版16 出土遺物 5 上. 自然流路01、土坑05(1)
 - 下. 土坑05 (2)、土坑04
- 図版17 出土遺物 6 上. 出土石器 a 面
 - 下. 出土石器 b 面
- 図版18 出土遺物7 その他の出土遺物

第1章 調査にいたる経緯と経過

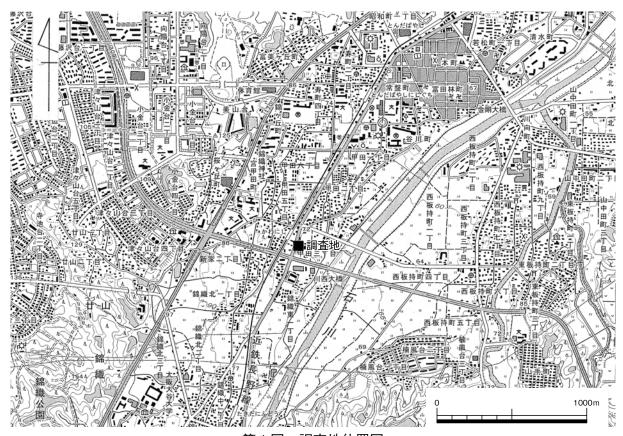
第1節 調査にいたる経緯

本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部から依頼を受けて実施したものである。 現地は、国道309号線と国道170号線が交差する交通量の激しい部分であり、調査原因は一般国道 (旧) 170号線歩道設置工事である。

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の甲田南遺跡に該当するので、事業主体である大阪府富田林土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課は、その取り扱いについて協議を行った。工事内容は、国道170号線を東側に道路幅を約4m拡幅し、歩道も平行に移動させ設置するものである。

ところでその部分における工事は、工事予定箇所の北側と南側の現況の違いに応じて、異なるものである。すなわち、北側80mの現況は水田であり、そこに基礎工事が入る。遺物包含層と遺構面に到達し、破損することは明らかで、発掘調査が必要であると判断された。それに対して、南側150mの現況は、すでに水田面の上に厚く盛土がなされており、道路と歩道の基礎工事はその盛土内におさまる可能性が高いと考えられた。そこで後者については試掘調査を行い、その結果、工事による掘削が盛土内におさまることが確認された。

以上の結果のもとに、工事予定箇所の内、北側80mについてのみ本調査を実施することになったものである。



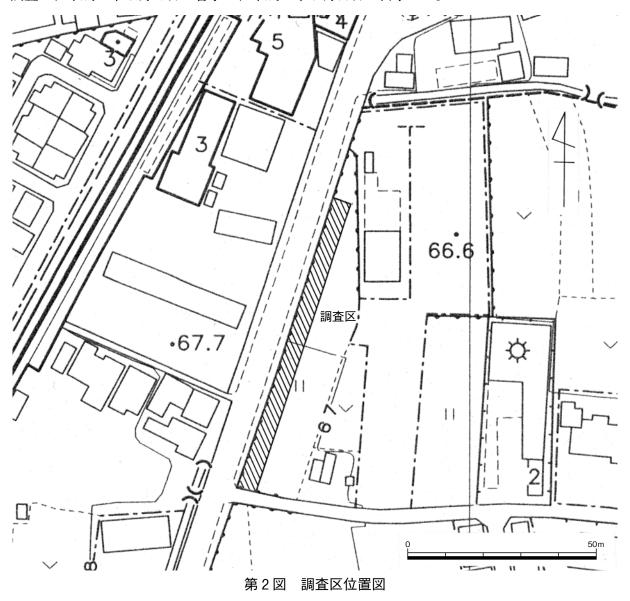
第1図 調査地位置図

第2節 調査の経過と方法

今回の調査地は、富田林市甲田 3 丁目である。調査区は、国道170号線の東側に沿って長さ約80 m、幅は場所によって若干異なるが約4 mであり、調査面積は316㎡である。交通量の激しい所なので掘削土の場外搬出を避け、あわせて工期を短縮するためにも、掘削土置き場は調査区に沿って東側を借地して確保した。

調査区の平面形態は細長く幅も狭い。そこで調査区北端の中央に0ポイントを設定して、そこから南に5mごとに仮杭を打設して調査小区を設定し、それを基準に調査を進め、最終的に国土座標と合成する方法をとった。調査で設定した仮杭・調査小区と国土座標との関係は、第4図のとおりである。

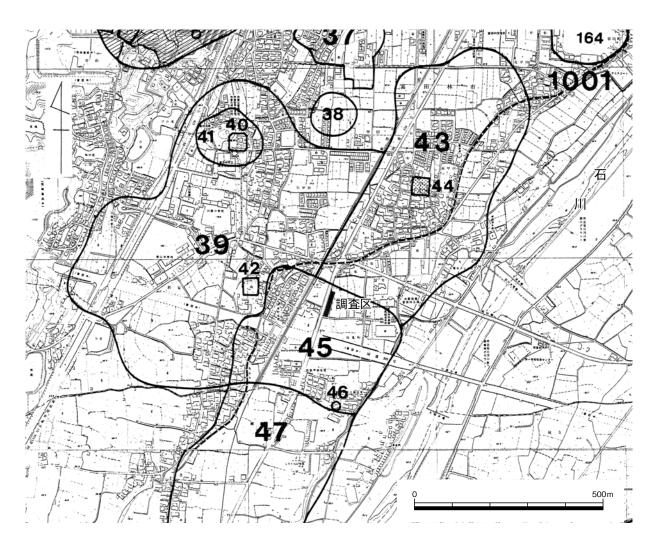
現代の耕作土と床土は重機で掘削・除去し、それ以下を人力によって掘削・調査した。そして 遺構面での人力掘削がほぼ終了した時点で、ヘリコプターによる写真測量を実施している。現地 調査は、平成21年8月17日に着手し、平成21年9月30日に終了した。



第2章 位置と環境

甲田南遺跡は、富田林市の石川左岸に立地する遺跡である。この地域は、東の金剛山地と西の 富田林丘陵に挟まれた狭長な谷底平野であり、「石川谷」と呼ばれる。石川谷は河岸段丘の形成 が著しく、特に左岸が良好で、中位段丘と下位段丘の二面からなる。甲田南遺跡はその下位段丘 面に立地し、現在でも遺跡の北から西南にかけて中位段丘崖が観察できる。なお下位段丘は石川 の洪水被害はないが、農耕をおこなうには水利の便が大変悪いことが短所である。

第3図の重要な点は、中位段丘端部を走る東高野街道(1001)で、このラインが中位段丘と下 位段丘の境界にほぼ合致する。東高野街道より西は中位段丘、東は低位段丘である。よって甲田 南遺跡(45)と錦織遺跡(47)は下位段丘面、新家遺跡(39)や甲田遺跡(43)などは中位段丘 面に立地することになる。甲田南遺跡より東側は、石川の洪水を被る氾濫低地であり、居住には 適さず遺跡は確認できない。



38. トユノ浦遺跡 42. 新家古墳

46. 川西古墳

44. 水郡邸 (府指史) 164. 谷川遺跡

41. 錦織神社境内遺跡

1001. 東高野街道

第3図 周辺の遺跡分布図

^{39.} 新家遺跡 43. 甲田遺跡

^{47.} 錦織遺跡

^{40.} 錦織神社本殿ほか (重文)

^{45.} 甲田南遺跡

第3章 調查成果

調査区の平面形態は長く幅は狭いので、現地調査では、調査区の北端に 0 ポイントを設定し、南に 5 m毎に仮杭を打設して調査小区を設定して進め、最終的に国土座標と合成(第4図)した。本報告では、仮杭による調査小区名称で記述する。

第1節 層序

調査では、調査区の東壁約80m分の土層断面図を作成した。層序は形成過程・性格等から5層に大別できるが、最下層を遺構のベース層(第5層)と、それ以前の石川の河床であったことによる堆積等(第6層)を分離して報告する。

第1層:現代の耕作に関わる土層(1-1~3層)

現代の耕作土である。調査区北半の耕作土上面の標高は約66.4mであるが、39m地点の東西方向にはしる大畦畔を境にして、調査区南半の田圃の標高は10cm程度高く約66.5mである。層厚20~30cm。

第2層:黄褐色系の粗砂小礫混じり土(2-1~9層)

中世以降に形成された耕作土の集積であり、北から1.6m、14.2m、34.3mの地点に小畦畔が、39mの地点に大畦畔が確認できる。本層の上面は、第1層の床面になるので、酸化した鉄分が沈着して黄褐色に変色する。また第2層を構成する各層の上面も、鉄分の沈着によってやや強い黄色に変色する。1~4層に分層できるが、第6層が盛り上がって高くなる57m地点より南では、1層になる。

第3層:褐灰色粗砂・小礫混じりシルト質土

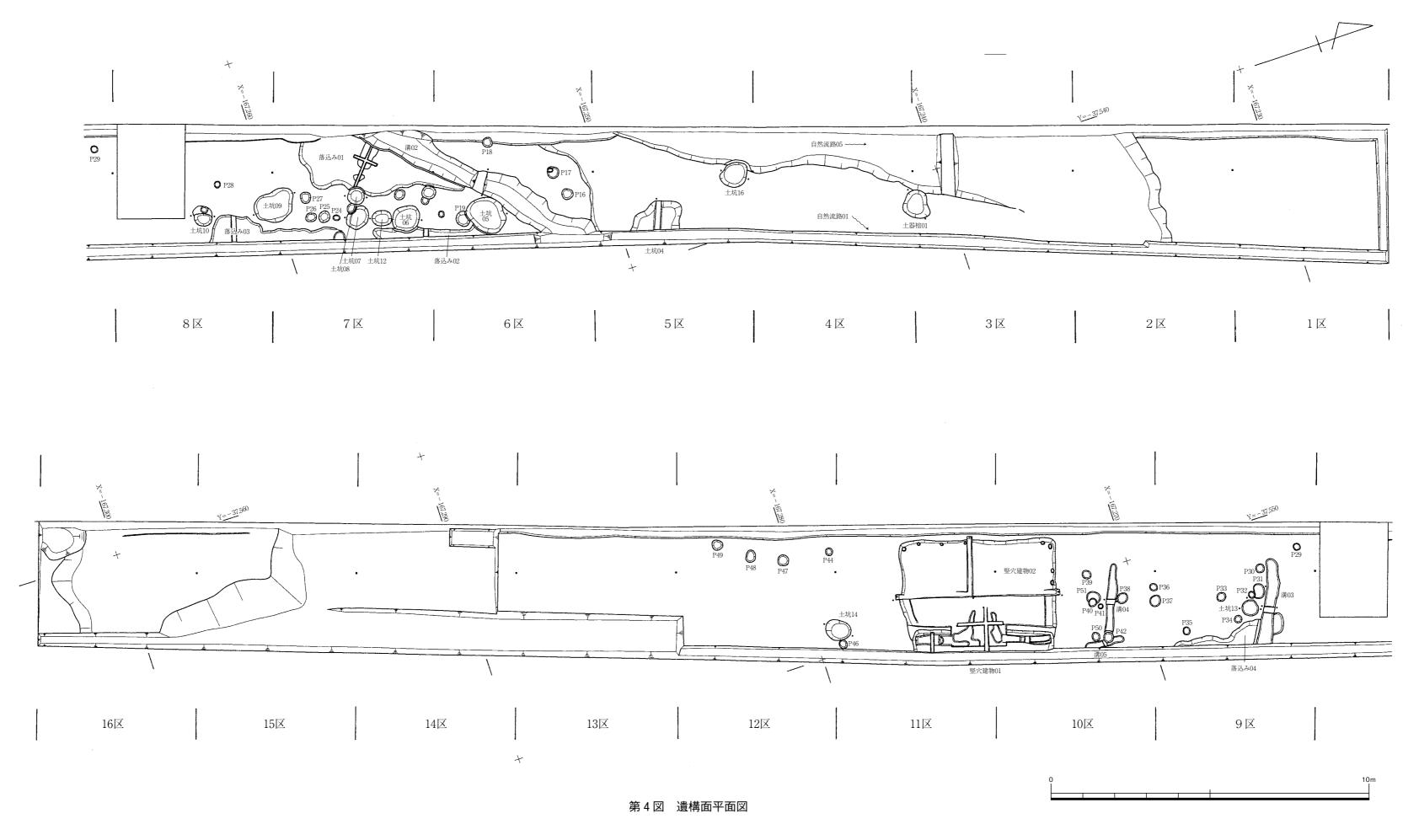
北方の14 m~30.5 mの間と、11 mと37 m地点で明確に確認できる。また分層し得ていないが、第4層上面がいく分シルト質が強くなり、本層の痕跡を示す箇所も確認できる。中世の遺物包含層と考えられ、本土層を埋土とする遺構も確認できる。非常に薄く、層厚2~6 cm程度。

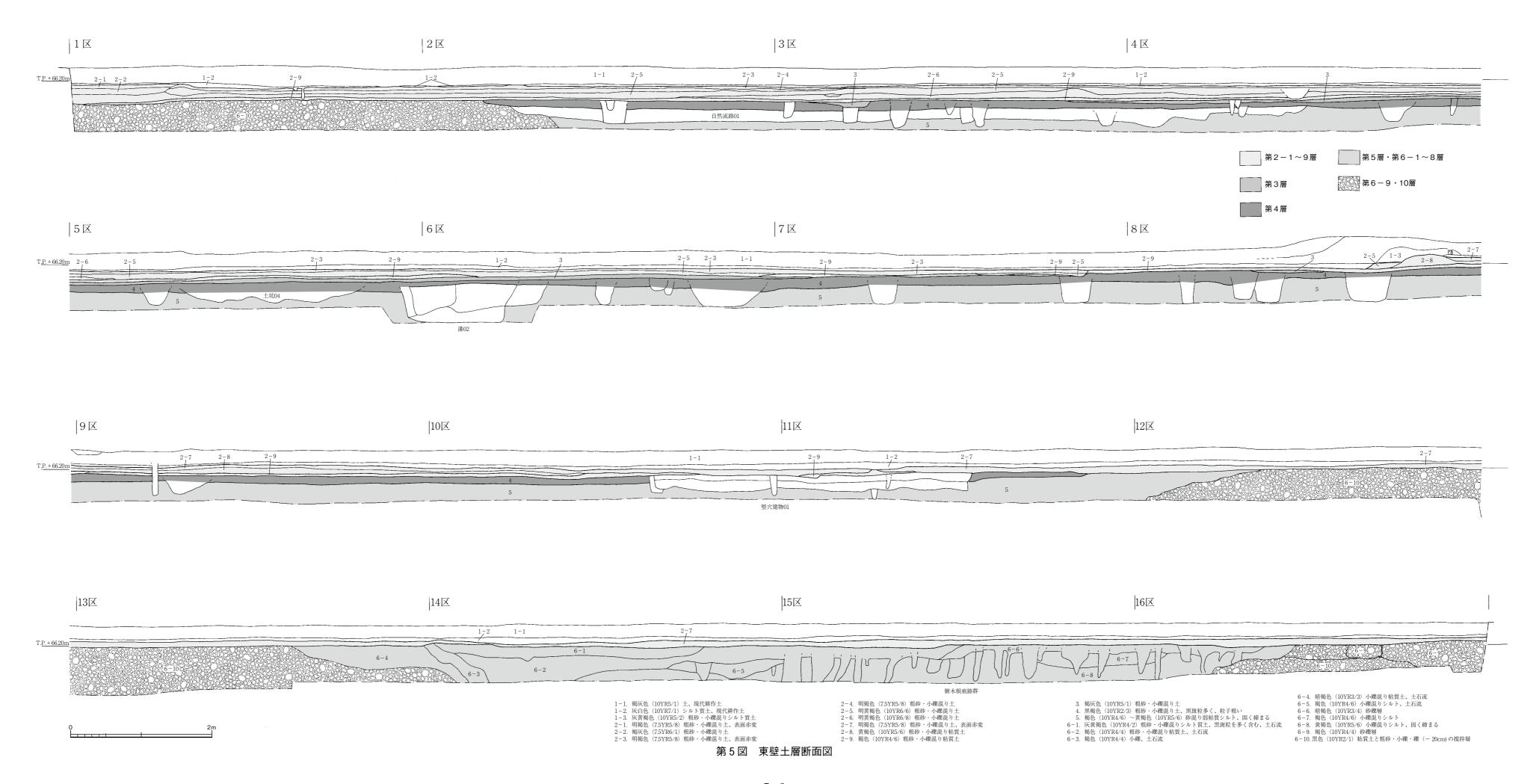
第4層:黒褐色系の粗砂・小礫混じり弱粘性土

いわゆる黒色帯であり、上面は古墳時代後期以降、中世までの遺構面である。弥生時代から古墳時代にかけて形成された遺物包含層で、多くの弥生土器片を含む。北端と南部は第2層段階に削平されており、5.8 m~54.3 m地点で残存する。第3層との層境は本層表面が撹拌された状況を呈しやや不明瞭である。また第5層との層界はきわめて不明瞭である。層厚は箇所により5~15cmの幅があるが、おおむね10cm程度である。

第5層:褐色~黄褐色系の砂混じりシルト質土

本層上面は、弥生時代と古墳時代の遺構検出面である。石川の河床であったことによって運ばれた礫層群の微低地での最終堆積であり、色調は褐色(10YR4/6)~黄褐色(10YR5/6)を呈し、土質は堅くしまる弱粘性シルトである。調査区の北半~中程では粗砂と小礫を著しく含むが、南





半では漸移的に粗砂が主体になり、小礫は減少する。第4層との層境は不明瞭であり、また本層下部で礫・小礫が増加することで第6層に移行する。層厚は20~30cm程度。

第6層:褐色系の礫層など(6-1~10層)

石川の流れによって運ばれた礫層(6-10層)とその間に形成された微低地へのシルトの緩やかな堆積($6-6\sim8$ 層)である。本層からは遺物は出土しておらず、形成時期は不明である。また調査区南方では土石流($6-1\sim5$ 層)が確認できた。

第 $6-6\sim8$ 層は、褐色 (10YR4/6)~黄褐色 (10YR5/6) を呈するシルトである。多数の樹木と考えられる痕跡が確認できた。この痕跡下部を平面で観察すると、根の痕跡が確認され、その部分には径数ミリの黒褐色粘質シルトのブロック粒が多数入る。

第6-10層は、粗砂・小礫・礫の撹拌層に黒色(10YR2/1)粘土が入り込む状況を呈する。礫は最大で20cm程度の円礫である。本層は調査区の北端と南端、北から55~63mの間で盛り上がりとして確認できる。

以上の層序を、後に報告する遺構・遺物との関連で概観すれば、以下のようになる。

- ①第5・6層は、石川の流れによって運ばれた礫層と、その間に形成された微低地に流れ込ん だ流水によって形成されたシルト堆積である。本層段階の表面は凹凸が著しく、第5層はその最 終段階に微低地に形成された遺構ベース土である。本層出土の遺物は皆無なので、形成時期は不 明であり、人の生活痕跡は確認できない。
- ②第4層は、弥生時代から古墳時代に形成された遺物包含層であり、多くの弥生土器片を含む。報告する遺構の多くは、本層中あるいは本層除去後に検出したものである。遺構の中心時期は弥生時代中期後半で、土坑・ピット・焼土面を伴う落ち込みと土器棺であるので、当時の居住域に墓域が近接していたのかもしれない。なおカマドを設置する竪穴建物は、本層上面を切り込んだ状況で確認しており新しい時期の遺構である。
- ③第3層は、中世の遺物包含層である。地形が低くなる調査地の中央部のみに残存し、第6層の盛り上がっていた北方と南方は、削平されたと考えられる。この段階の遺構は墓と柱穴が確認できたことからも居住域と考えられ、田圃などの生産域ではなかったようである。
- ④第2層は、中世以降に形成された耕作土の重層的な堆積であり、第2-9層段階で凹凸のある地形が改変され、平坦化したと考えられる。数層に分層できる本層上面は、鉄分が沈着して黄褐色に変色すること、畦畔が確認できること、1・2区で本層起源の埋土の入った牛の足跡が確認できること、8区で第2層から第1層に連続する大畦畔が確認できることなどから、本段階以降には土地利用は田圃となり、現代に至ることがわかる。

第2節 遺構と遺物

現代の耕作土と床土は、重機で掘削・除去し、それ以下を人力によって掘削・調査した。現代の耕作土と床土の下は、中世と考えられる耕作土、古代以前に形成された遺物包含層、古代以前の遺構面になる堅くしまるシルト層であり、遺物包含層上面とシルト層上面で遺構を検出した。

調査区は、全域が下位段丘面でかつての石川河床である。調査によって確認した最下層は、最大20cm程度の礫層と黒色粘土の撹拌層であり北端8m、南端4mで確認し、側溝中の所々でもその上面が確認できた。この礫層は非常に凹凸が激しく、遺構面になる堅くしまるシルト層は、その低くなった部分に最終的に堆積したものである。

中世墓01(第6図) 3区の第4層上面で検出した隅丸方形の土坑である。規模は長軸(東西)1.55 m以上、短軸(南北)1.46m、深さ15cm程度である。遺構の東辺は側溝で破損したが、底面の傾斜から長軸1.6m程度に復元できる。上面では木棺などの痕跡は確認できなかったが、瓦器・土師器の他、立て掛けられた状況で鉄鎌が出土し、また設定した土層観察アゼに棺材と考えられる立ち上がりが確認できたので、木棺墓と考えられた。

棺材の痕跡と考えられる立ち上がりは南北断面では倒れたためか不明瞭であるが、東西断面では良好に確認できた。木棺の大きさは、土層観察アゼの断面から東西1.1 m、南北 1.05 m程度に復元(第6図スクリーントーン)できる。なお周囲で、中世遺物包含層である第3層に類似する褐灰色~灰黄褐色系のシルト質土を埋土とするピット9を確認したが、本遺構との関連は不明である。

遺物は棺内と棺外で出土した。棺内遺物としては、鉄鎌が北東隅で石に立て掛けられた状況で出土した他に、中央より東方で瓦器・土師器碗(1群)が集中して出土した。棺外遺物としては、北東隅に瓦器小皿(2群)を重ねた状況で出土した他に、南西隅に瓦器椀1点が出土した。

遺物(第6図) $1\sim9$ は墓坑内の中央より東方で集中して出土(1群)した瓦器碗($1\sim7$)、土師器碗(8)、土師器皿(9)である。10 は墓坑北東隅(2群)の棺外に二点が重ね置かれた瓦器皿の内の一点である。

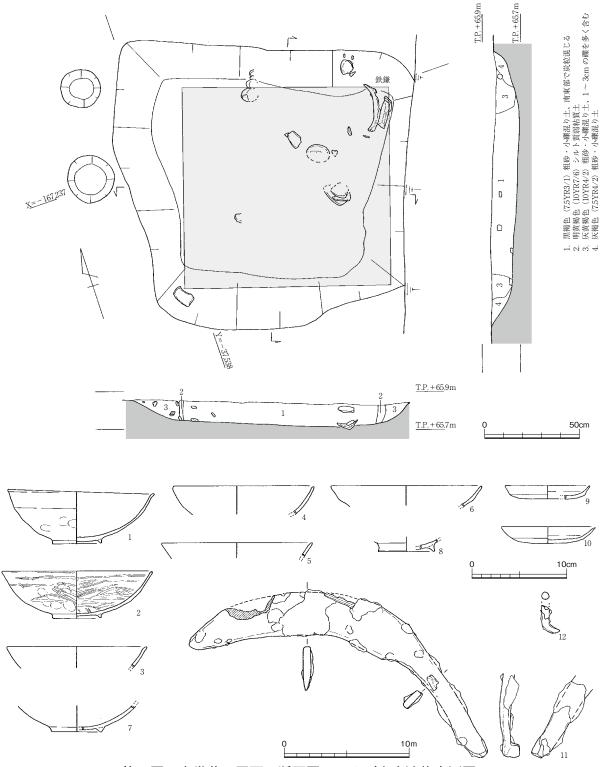
1~7は瓦器碗である。1は内面剥離のため調整不明。外面は成形時の指頭圧痕が巡る。口径 15.5cm、器高5.8cm、高台径5.2cm。2は内面へラミガキ、外面は口縁部ヨコナデ、体部は指頭圧 痕の後へラミガキ、口径16.0cm、器高5.0cm、高台径5.0cm。3・4・6は内外面とも磨滅のため 調整不明。5は内外面ヨコナデ。7は内外面とも磨滅のため調整不明。高台径5.2cm。

8は土師器碗である。内外面ナデ仕上げ。浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。

9 は土師器小皿である。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。口径9.0cm、器高1.3cm。

10は瓦器小皿である。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。口径約10cm、器高1.7cm。

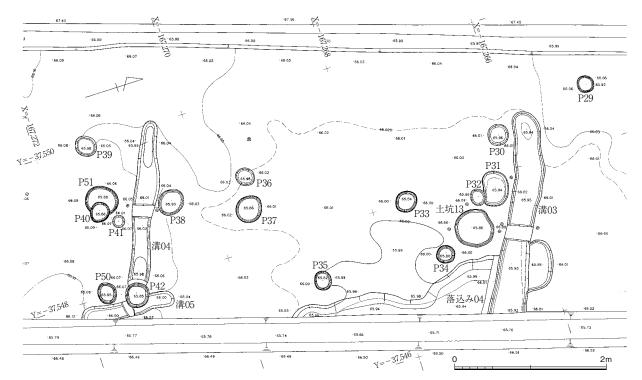
11は鍛造による鉄製曲刃鎌である。刃部側と背部側ともに茎部との境界が明瞭に叩き出されて形成されている。刃部の側面観は直線的ではなく、刃部先端と刃部基部を結ぶラインより中央部



第6図 中世墓01平面・断面図、および出土遺物実測図

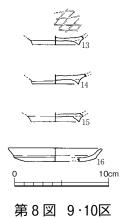
で 5 mmの空間ができる程度に湾曲させる (図版12参照)。この湾曲により、右手に持った場合の使用がより効率的なので、右利き用の鎌であることがわかる。なお茎部に木質の痕跡は確認できず、副葬された時点で木柄が装着されていたのか、鎌のみであったのかはわからない。

茎部付近から鍛造のカギ状鉄片12が出土した。先端を尖らせた直径 6 mmの鉄棒をカギ状に曲げたものであるが、何なのかはわからない。なお、この鉄器は折れているが、折れ面と鉄鎌に接合面はないので、両者は別個体である。



第7図 9・10区遺構平面図

9・10区溝・ピット群(第7図) 8区南半部から10区北半部にかけて、溝とピット群を検出した。遺構の所属時期は、すべてが明らかというわけではないが、第4層上面で確認できた遺構や、第3層が埋土になるピットがあり、なによりも瓦器などの中世土器片を出土するピットが多いので、この調査区の多くの遺構が中世と考えられる。溝03・04は5m間隔で平行して検出したもので、両者共に断面形は浅い皿形で、深さ6~8cm、埋土は褐灰色シルト質土である。一連の遺構であろうが、性格はわからない。溝03から土器細片が出土したが時期は不明である。



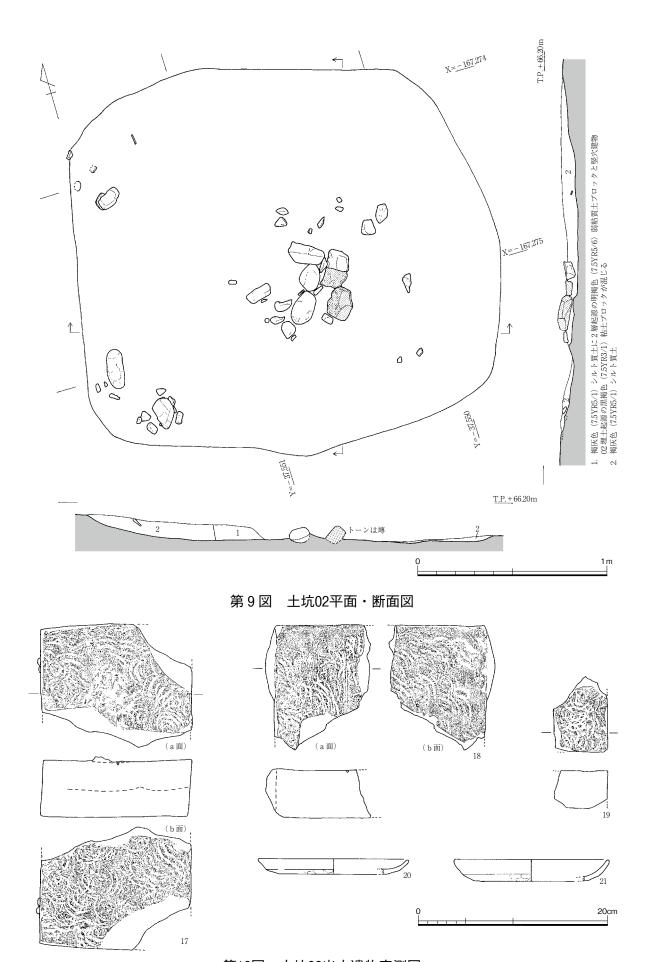
遺物(第8図) 図化し得たのは4点であるが、他に瓦器細片等が出土した 出土遺物実測図ピットは多い。

13はピット34出土の瓦器碗高台部。内面は格子状へラミガキ、外面ナデ仕上げ。14・15はピット40出土。14は土師器碗高台部で、全面ナデ仕上げ。15は瓦器碗高台部で調整不明。16はピット51出土の土師器小皿。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。

土坑02(第9図) 10・11区にまたがって検出した隅丸方形の土坑である。規模は東西2.3m、南北2.0m、深さ13cm程度で、断面形態は浅い皿状を呈する。埋土は第3層と考えられる褐灰色シルト質土に第2層がブロック状に入るもので、図化し得ないが多数の瓦器細片も出土した。中世に形成された廃棄土坑であるが、数10点の礫とともに古代塼の破片3点が出土した。

遺物(第10図) 遺構の時期を示す瓦器は、細片のため図化しえない。

17・18・19は塼の破片である。17は、両面と三側面の一部を残す。表裏面ともに同心円文圧痕の後、若干のナデ。側面は a 面図の右側面が横方向へラ削り(図では下から上)、上・左側面は



第10図 土坑02出土遺物実測図

ナデ仕上げ。断面の中央部に接合痕跡が残る。色調は灰色(N6/0~5/0)を呈する。

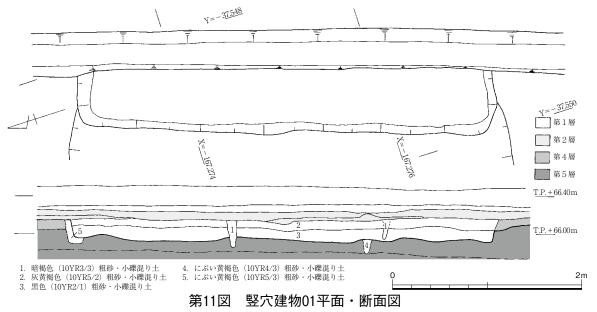
一面には縦方向のへう描き直線がある(以下 a 面と記載し、へう描き直線のない面を b 面と記載する)。細井廃寺等の類似資料を参考にすれば、このへう描き直線は、長方形塼の長辺と短辺のほぼ中央部を「十」に分割する「長短割付け線」である。そうすれば本資料のへう描き直線は、長軸方向の割付け線で、横方向の割付け線はさらに下方にあると考えられる。よって、法量は長さ22cm以上、幅15.6cm、厚さ5.8~6.0cmである。

18は a · b 両面と二側面の一部を残す。 a 面のへラ描き直線は長軸方向の割付け線である。法量は長さ26cm以上、幅約15cm、厚さ5.0cmに復元できる。 a · b 面ともに同心円文圧痕の後、若干のナデ仕上げ。左側面はヘラ削り仕上げ(図では上から下)、上側面はナデ仕上げ。色調は灰色(N4/0~6/0)を呈する。

19は塼の角部分の細片であり、一面と二側面の一部を残す。面は同心円文圧痕の後、若干のナデ。二側面はヘラ削り仕上げ。色調はオリーブ灰色(2.5GY6/1)を呈する。

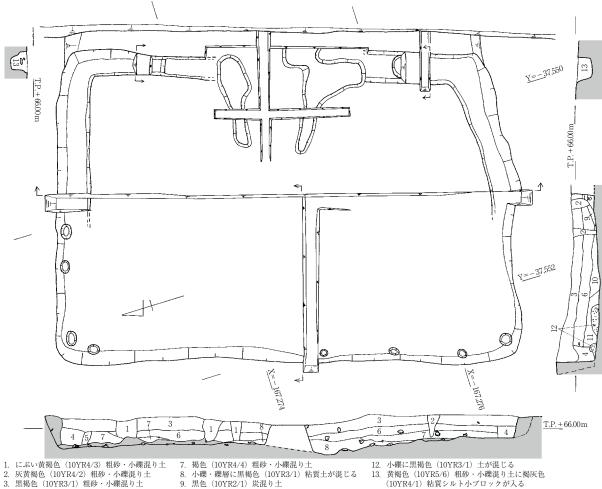
これらは南河内に類似資料がある。その一つであり、実見した細井廃寺の出土資料は、17・18 とは同一個体と間違うほどに法量・技法・焼成ともに酷似している。側面の二面がヘラ削り、二 面がナデ仕上げであることも同じである。

20・21は土師器皿の細片である。口縁部は内外面ョコナデ、底部外面は指押さえで仕上げる。 竪穴建物01(第11図) 10・11区にまたがり、第 4 層上面で検出した。竪穴建物02の東部を破壊 して築造された竪穴建物であり、建物の西側0.9 m分を調査したのみで大部分は調査範囲外であ る。平面規模は南北4.4 m、深さ25cm程度である。埋土は2 層で上層は黒色、下層は灰黄褐色を



呈する粗砂・小礫混じり土である。下層が貼床なのかは不明である。床面に柱穴や周溝は確認できなかった。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

竪穴建物02(第12図) 10・11区にまたがり、第4層上面で検出した。本竪穴建物の東側0.5mは、 竪穴建物01に破壊されている。平面形態はややいびつな長方形で、規模は南北約4.9m、東西約3.3

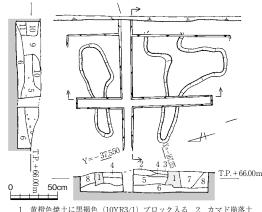


- 10.
- にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト質土 黒褐色 (10YR3/1) 粗砂・小礫混り土に黄褐色 11.
- (10YR5/6) シルト質粘土小ブロックが入る



2m

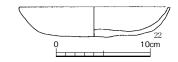
竪穴建物02平面・断面図



- 黄橙色焼土に黒褐色 (10YR3/1) ブロック入る 2. カマド崩落土
- 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土に明黄褐色粘土ブロック入る 明褐色 (7.5YR5/8) 焼土に焼土ブロック入る
- 炭の混じる黒褐色(7.5YR3/1)土に焼土ブロック入る 褐灰色(7.5YR4/3)シルト質土

- 黒褐色 (7.5YR3/1) 粗砂・小礫混り土 褐灰色 (10YR4/1) 粗砂・小礫混り土
- 褐灰色 (7.5YR5/1) シルト質土に 5 層が混じる、撹乱 黒褐色 (10YR3/1) 弱粘質シルト質土 (建物 01 埋土)
- 11. 褐灰色 (10YR4/1) 粗砂・小礫混り土

第13図 竪穴建物02のカマド平面・断面図



竪穴建物02出土遺物実測図

m。壁面に周溝を巡らせ、床面に柱穴は確認できなかっ た。なお建物の西辺と北辺の周溝底に黒褐色土の入る ピットが8箇所で確認できた。建物内埋土は、上・中・ 下層の三層よりなる。周溝は、中層からが切り込んで いるので、上層は最終的な埋土、中・下層は2段階の 貼り床を示すと考えられる。

建物の東辺中央部の壁面に接して、カマドが造り付 けられている。カマドは東半上部が竪穴建物01の築造 によって破壊されるが、その掘削深度が浅いためにカ マド下部とそれに接続する東側周溝が残存していた。 焚口幅0.5m、奥壁から約1.0m屋内に突出する。

カマドは竪穴建物の下層埋土の上面に築かれてお り、下部14~18cmが残存していた。カマド胎土は、黄 橙色粘土に黒褐色粘土ブロックが混じるもので、スサ は用いない。カマド内から遺物、および鍋や釜を支え

る支脚も出土していない。建物内を巡る周溝は、カマドに接続するが、その深さはカマド中軸線から北1.15m、南1.25mの地点で浅くなる。

遺物(第14図) 土器細片が出土したのみで、時期の判明するものはない。

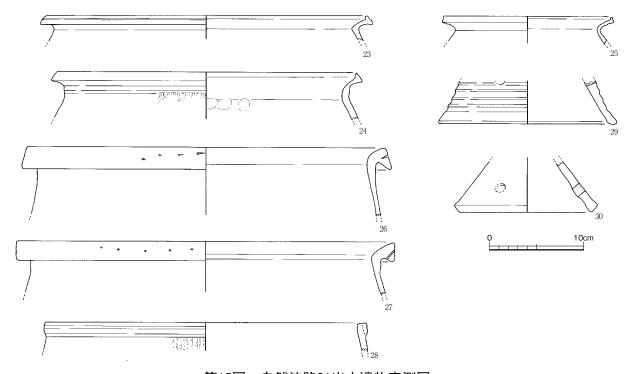
22は埋土の最上層から出土した土師器皿である。内外面とも剥離のため調整不明。口径16.0cm、器高3.1cm、胎土はやや粗く1~3mmの赤色粒を多く含む。平安時代初頭に位置付けられるもので混入品と考えられる。

自然流路01(第4図) 段丘崖の裾に沿って流れる自然流路であり、規模は幅17m前後と考えられる。南西から北東方向に流れてきた水流が、北端の礫層に衝突して、流水方向が東方に転じる部分である。よって攻撃面に相当する北岸付近が急激に深くなり、南岸に向かって除々に浅くなる。埋土は、黒褐色(10 Y R 3/1)粗砂・小礫混じり土で、弥生土器が含まれる。

遺物(第15図) いずれも細片である。自然流路からの出土であるが、著しい磨滅はしておらず、 流されてきたものではないことがわかる。

23・24は非生駒西麓産胎土(以下、非河内産胎土という)の大型甕である。23は口縁部内外面ョコナデ、端面は強いョコナデでくぼむ。24は口縁部内外面ョコナデ、体部外面にハケ目、内面に指頭圧痕が巡る。外面屈曲部は、強いョコナデとハケ目を施すことによって突帯状に成形しており、特徴的である。25は非河内産胎土の甕である。口縁部内外面ョコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。

26・27は生駒西麓産胎土(以下、河内産胎土という)の大型甕である。26は口縁部ョコナデ、体部は磨滅で調整不明。口縁部端面に刺突文を右方向に巡らせる。刺突の深さは拡張部の中ほどまでである。27は口縁部ョコナデ、体部は磨滅で調整不明。口縁部端面に刺突文を巡らせる。刺



第15図 自然流路01出土遺物実測図

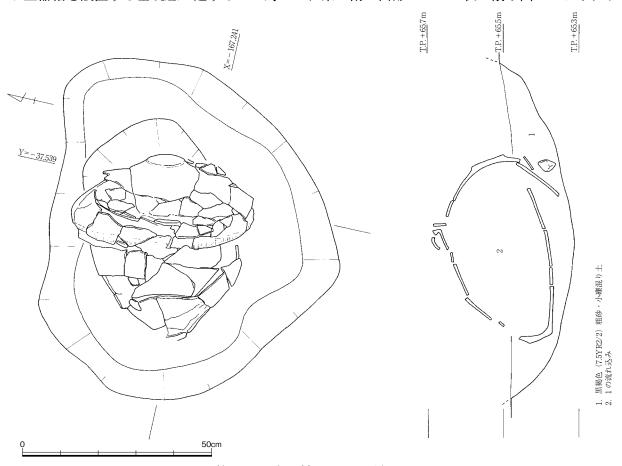
突は拡張部を貫く。

28は非河内産胎土の鉢である。口縁端部外面に粘土帯を貼り肥厚させる。口縁部ヨコナデ、体部外面にクシ描き簾状文を左方向に巡らせる。29は非河内産胎土の器台である。内外面ヨコナデ。外面に凹線文4条が残る。透かし孔痕跡1が確認できる。30は非河内産胎土の高坏である。外面は剥離のため調整不明、内面ヘラケズリ。三方透かし孔。

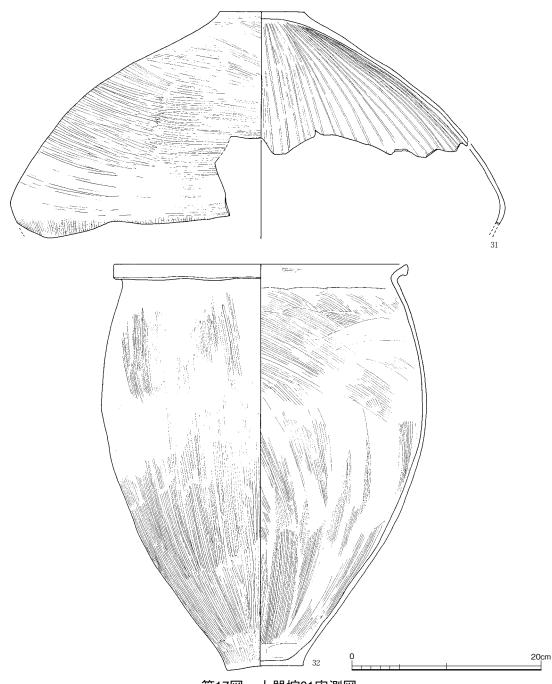
自然流路05(第4回) 段丘崖の裾付近に沿って流れる自然流路の一つである。自然流路01埋土の掘削に先立って設定したトレンチで確認した自然流路である。埋土はもろい。水流方向は南西から北東で、断面観察のアゼ部分で北端の礫層に衝突するため急激に深くなり、それより以北の埋土は自然流路01の流れによって残らない。アゼ部分での幅は1.8mである。

土器棺01(第16図) 完形の甕を棺身とし、口縁部を打ち欠いた大型鉢で蓋をする土器棺である。 自然流路01埋土の掘削中に土器棺の上半が露出し、その周辺を精査して墓坑を確認した。土器棺 蓋の大型鉢が完存する状況からすれば、本来は自然流路01の埋土上面から墓坑が掘り込まれてい たと考えられる。墓坑の平面形はいびつな卵形で、検出した時点での規模は長軸約90cm、短軸約 80cm程度であり、深さは40cm以上であったと考えられる。土器棺は墓坑底に25°の角度で設置さ れていた。人骨は残らないが、状況から被葬者の頭部は東向きである。

ところで、墓坑掘り込みの状況は一様ではない(図版8下)。墓坑内の北部は急角度で掘り込み土器棺を設置する墓坑底に達するのに対して、東・南・西部はテラス状に削り出しており、ゆ



第16図 土器棺01平面・断面図

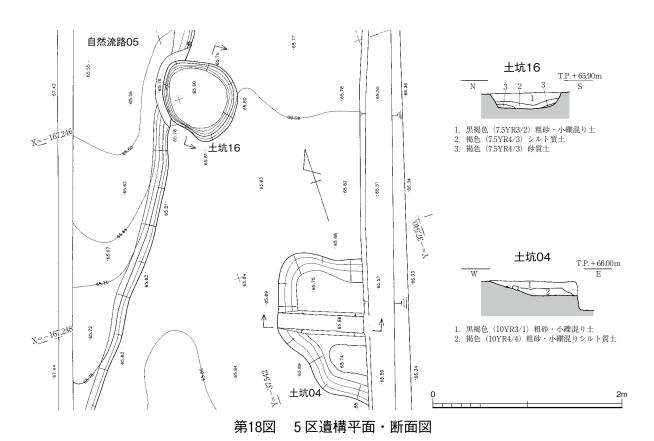


第17図 土器棺01実測図

るやかに墓坑底に至るように掘り込まれていた。土器棺は墓坑北壁にもたせかける一方で、不安 定になる東・南・西部では土器棺と墓坑底との隙間に小石を詰め込んで安定化をはかっていた。 また以上の状況は、埋葬者が土器棺を南側から設置した可能性の強いことも示している。

遺物 (第17図) 31 は河内産胎土の大型鉢であり、口縁部を打ち欠いて棺蓋にしたものである。 体部外面の屈曲部以下は横方向の分割ヘラミガキ、屈曲部より上は左への細かい単位のクシ描き 簾状文を左方向に巡らせる。内面は放射状ヘラミガキ。32は非河内産胎土の大型甕であり、棺身 である。口縁部ヨコナデ、体部外面は縦方向ヘラミガキ、内面はハケ目仕上げである。

土坑04(第18図) 4区の溝1埋土上面で検出した不定形な土坑であり、東の調査区外にのびる。 規模は南北約1.8m、東西約1.4m以上、深さ約15cmで、浅く底が平坦な土坑である。埋土は二層



で、上層が黒褐色粗砂・小礫混じり土、下層が褐色粗砂・小礫混じりシルト質土で、弥生土器の みが出土した。なお側溝の掘削時に本土坑埋土から、磨製石剣の刃部(第23図45)が出土してい る。

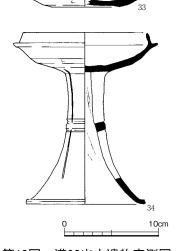
土坑16(第18図) 4区の自然流路01埋土を除去した段階で検出した土坑であり、自然流路05を切っている。平面形は楕円形で、規模は長軸93cm、短軸75cm、深さ約16cmで、浅く底が平坦な土坑である。弥生土器片が10数点が出土したが、時期の詳細は不明である。

溝02(第19図) 6区で検出した、南西から北東方向に掘削された溝であり、約7m分を確認した。 断面規模は検出幅で0.6~1.0m、深さ約50cmであり、断面形態は「凹」形を呈する。壁面は急角

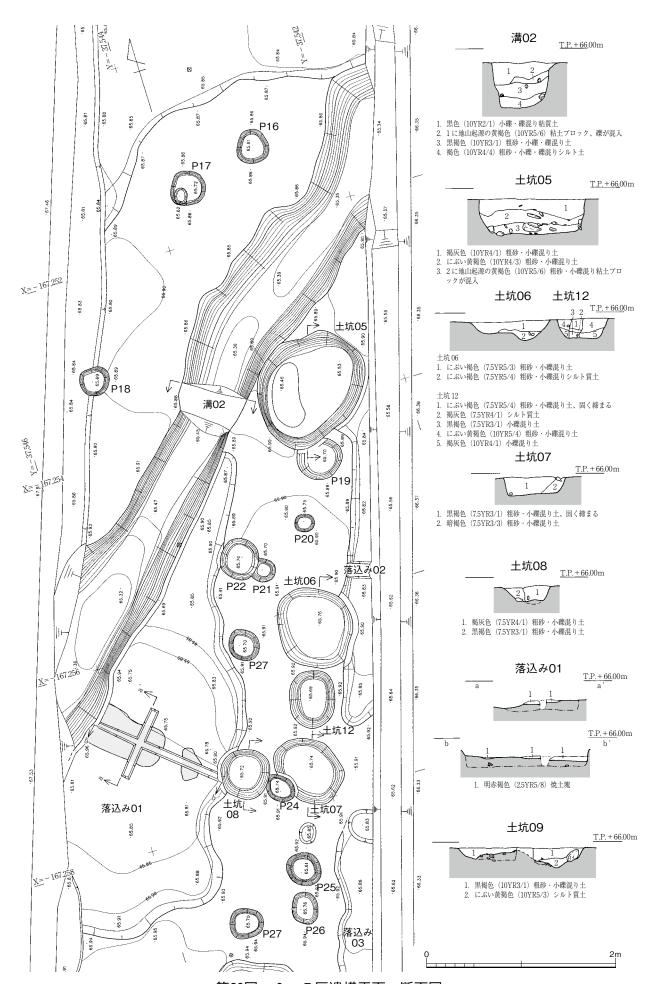
度に掘削され、礫層表面を20cm程度掘り込む。埋土は4層で、最上層から6世紀後半の須恵器が集中的に出土した。

遺物(第20図) 33は須恵器坏身である。口径14.4cm、高さ3.6cm、胎土はやや粗く1~3mmの白色砂粒を多く含む。34は須恵器高坏である。二段三方透かしを巡らせる。透かしは筋状に切り込むもので特徴的である。脚部内面に絞り痕跡が残る。口径13.1cm、高さ18.1cm、胎土はやや粗く1~3mmの白色砂粒を多く含む。

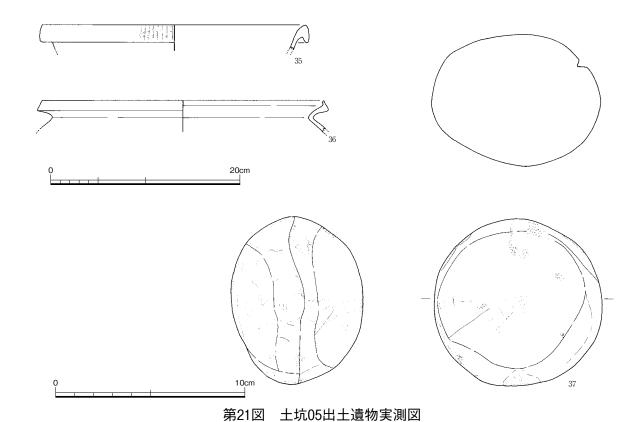
土坑05(第19図) 7 区で検出した楕円形の土坑であり、溝02に切られる。規模は長軸1.25m、短軸1.05m、深さ38cm程度で、断面形は側壁が急角度で掘り込まれ、底は平坦である。埋土は三層に分層でき、上・中層は褐色を呈する粗砂・小礫混じり土、下層は中層に



第19図 溝02出土遺物実測図



第20図 6・7区遺構平面・断面図



地山起源の黄褐色粘質土ブロックが多数混じる。土坑中央の底面から、径20cm程度の扁平な円・ 楕円形の砂岩自然礫を積み上げた特異な状況で出土した。この自然礫は、調査区の北・南端で確 認できた石川氾濫源を構成する礫と同様である。これらの積み上げられた自然礫には使用痕跡は 認められなかったが、その最上部からわずかに条痕をとどめる磨石が出土した。

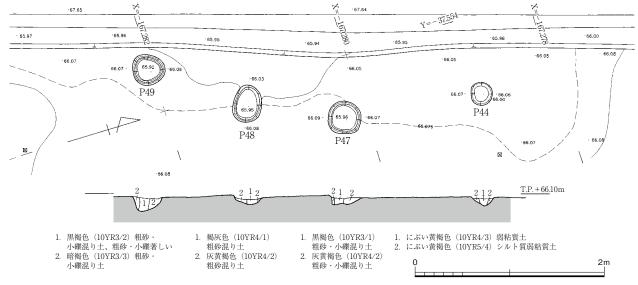
遺物(第21図) 玉葱袋1/2程度の弥生中期後半の土器片とサヌカイト剥片 4 点が出土した。

35は河内産胎土の広口壷である。口縁拡張部にクシ描き簾状文を巡らせる。36は非河内産胎土の甕である。口縁部ョコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。37は扁平な円礫を磨石として使用したものである。非常に粗い条痕が多数認められる。平面は直径9.0~9.3cm、厚さ7.0cm。

落込み01(第19図) 7 区で検出した不定形な落込みであり、性格は不明である。溝02に破壊されているが、溝の北側にはのびない。規模は長軸約5.3m、短軸約1.7m程度を確認した。埋土は、弥生土器片を含む黒褐色(7.5 Y R 3/2)粗砂・小礫混じり土の一層で、長軸の両端から中央に向かって漸移的に深くなり、最深部で検出面から20cmである。

南西から最深部にいたる直前で、短軸に平行する方向の焼土塊を検出した。焼土塊は $_{\tau}$ 所で検出し、西のものは幅 $_{\tau}$ 40~ $_{\tau}$ 45cm、長さ $_{\tau}$ 80cm以上の長方形である。トレンチを入れた結果、中心部分が $_{\tau}$ 5 cm程度で最も厚く、周辺に向かって薄くなる。また焼土塊は内部にスサ等は含まず、ベース土である黄褐色砂混じり弱粘性シルトに直接のり、下部構造はない。なお焼土塊上面と周辺の埋土には、多くの炭粒($_{\tau}$ 7 mm程度)が散布していた。時期は不明である。

12区ピット群(第22図) 円弧状に並ぶピット 4 基であり、遺構面である黄褐色砂混じり弱粘性シルト上面で検出した。11区南 1 mから南の16区までは、包含層は残存しておらず現代耕作土と



第22図 12区ピット群平面・断面図

床土の直下が遺構面になるが、ベースが黄褐色砂混じり弱粘性シルトである部分では上面からよごれておらず、著しく削平されたことが想定できる。ピットはいずれも柱痕跡が確認できるので柱穴で、柱痕跡の直径は $10\sim11$ cmである。調査範囲外で円形にまわるとすれば、直径は $8\sim9$ m程度である。竪穴建物の可能性があるが、断定できない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

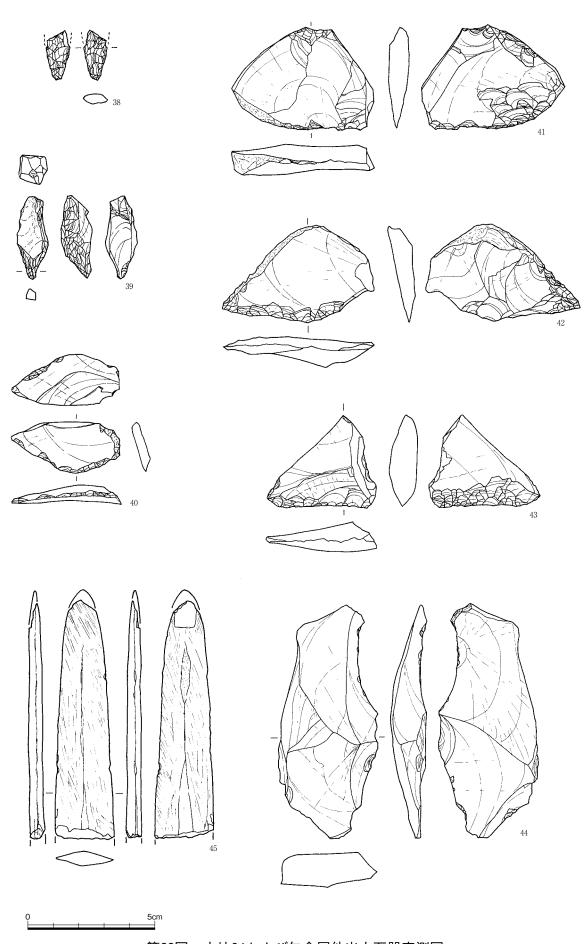
出土石器(第23回) 出土土器は、縄文土器や弥生前期・後期土器は含まれておらず、弥生中期後半の土器が大部分なので、石器もほとんどが弥生中期後半と考えられる。他に多数のサヌカイト剥片が出土している。石包丁・各種石斧などの磨製石器、砥石などは出土していない。

38~44は、サヌカイト製の打製石器である。38は6区第3層出土の石錐である。石錐は刃部の「錐部」と、手に持つ「頭部」からなり、側縁部が摩耗しているので錐部破片であろう。39は7区第3層出土の石錐である。完形品であるが、錐部の使用痕は顕著ではない。40は竪穴住居02出土の削器で、混入品である。41は4区第2層出土の削器である。両面からの敲打で刃部をつくる。42は6区第4層出土の削器。43は4区第4層出土の削器。両面からの敲打で刃部をつくる。44は6区第溝02出土の剥片である。部分的に使用痕が認められる。

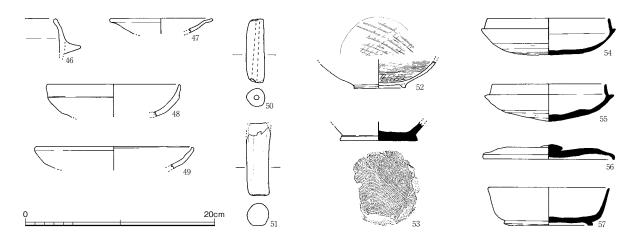
45は粘板岩製の磨製石剣である。土坑04出土。大きさは残存長9.5cm、最大幅2.4cm、最大厚0.6cmで、先端部と基部側が欠損する。表面に細かな研磨痕が認められる。先端から6.5cmは両面に稜線を形成し断面形は扁平な菱形を呈するが、それより基部側では稜線は形成しない。さらに刃部片側の基部側1.8cmは、砥ぎ出さずに幅 1 mm弱の面を形成しており、剣身と基部との境界部分であることがわかる。

その他の出土遺物(第24図) 層序の形成時期の目安になる資料、今回調査区で営まれた時期を示すなどの資料を一括して報告する。

46~50は、様々な小区の中世遺物包含層から出土したものである。46は2区出土の羽釜である。 内外面ヨコナデ仕上げ。胎土に赤色粒を含む。47は1区出土の土師器小皿である。胎土に赤色粒



第23図 土坑04および包含層他出土石器実測図



第24図 その他の出土遺物実測図

を含む。48は14区出土の土師器鉢である。口縁部ョコナデ、体部内外面ナデ仕上げ。49は10区出土の土師器皿である。口縁部ョコナデ仕上げ。50は3区出土の土錘である。手捏ねで成形する。長さ6.8cm、最大径1.9cm。

51は4区東側溝の掘削で出土した瓦質土器の脚部である。出土層序不明。縦方向のナデ仕上げ。 52は10区第3層出土の瓦器碗である。体部内面は密な横方向へラミガキ、見込みは斜格子状へラミガキ、外面は磨滅のため調整不明。53は2区第3層出土の須恵器底部で、壷と考えられる。体部内面はロクロ回転による成形痕、外面は回転ナデ仕上げ、底面は制止糸切り痕が残る。54は7区出土の須恵器坏身である。復元口径12.8cm、器高3.9cm。55は10区東側溝の掘削で出土した須恵器坏身。層序不明。復元口径12.2cm、器高3.9cm。

56・57は6区中世遺物包含層からの出土である。遺構の密集する地区での人力掘削中の出土で層序の誤認の可能性がある。56は須恵器蓋。回転ナデ仕上げ。口径13.8cm、器高1.6cm。57は須恵器坏。回転ナデ仕上げ。口径12.8cm、器高4.0cm。

第4章 まとめ

今回の調査で、明らかになったことは以下のようなものである。

①甲田南遺跡は、弥生時代中期中頃から後半の遺跡として知られている。それは国道309号線、および隣接するマンションの建設に先立って行われた発掘調査で明らかになったもので、多数の住居と方形周溝墓が確認され、そこが低位段丘面に形成された集落の中心部であることが判明している。その一方、そこから80m離れた今回の調査地周辺は微低地であり、また隣接地で行われた複数の調査でも弥生時代の遺構は未確認なので、集落域からは外れると考えられてきた。

しかし今回、遺構密度は高くないものの、土器棺や土坑の他、住居の可能性のあるピット群も確認でき、包含層からの弥生土器片の出土も多い。時期はいずれも中心部と同じ弥生時代中期後半なので、中心部から距離を置きつつも、小規模な居住域が存在したことが明らかになった。

- ②第2層を除去した段階で、若干ながら中世の遺構と遺物が確認できた。大規模開発以前の土地利用の在り方を示すものである。木棺墓と9・10区溝・ピット群が確認できたので、居住域とそれに隣接した中世墓と考えられ、水田や畑などの生産域ではなかったようである。しかし、いずれにしても今回の調査範囲が狭いこともあって、中世集落全体の中での位置付けは難しい。
- ③中世以降に凹凸のある地形が改変され、平坦化したことがわかった。それは第2層段階の耕作土の集積と大・小畦畔や、調査地周辺が条里地割の南端に想定されていることからも、その開発は耕地の確保である。本地域での大規模開発の一端を示すと考えられる。またその段階の大畦畔が、何度か盛り上げがなされ、現代の地割に引き継がれていることも確認できた。
- ④土坑02出土の塼は、主に南河内地域で見つかる「南河内型同心円文塼」と呼称されるものである。二つの系統があるが、一つは南西0.9kmに所在する細井廃寺に使用するためのもので、7世紀後半に位置付けられる。共通する要素は、両面ともに同心円文圧痕を残す、片面に十字のへラ描き割付け線を刻する、側面に文様を施さないなどである。

ところで土坑02は、中世の遺構なので、塼自体は混入品である。そして、同じく細井廃寺に近接する錦織遺跡や錦聖遺跡でも、同様の塼が中世の土坑等から出土しており、細井廃寺から転用されたものが廃棄されたと考えられている事に注目したい。甲田南の事例もそれらと共通するのである。南河内地域における、何らかの社会動向の中での産物と考えておきたい。

註

- 1) 粟田 薫「甲田南遺跡の弥生時代集落の歴史的意義」『平成 7 年度 富田林市内遺跡群発掘調査報告書』 富田林市教育委員会 1996
- 2) 鍋島隆宏「仏陀寺古墳出土の塼について」 『太子町立竹内街道歴史資料館 館報』第6号 2000

報告書抄録

ふりがな	こうだみなみいせき						
書 名	甲 田 南 遺 跡						
副書名	一般国道(旧)170号線歩道設置工事に伴う発掘調査						
巻 次							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	$2\ 0\ 1\ 0-8$						
編著者名	山田隆一						
編集機関	大阪府教育委員会						
所 在 地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)						
発行年月日	平成23年 3 月31日						

ふりがな	ふりがな	コー	- F	北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	0/"	0///	阿里沙川	(m²)	泗 且,
こうだみなかいせき 甲田南遺跡	ままかまとんだ ばいし 大阪府富田林市 こうだ 5±2 あ 甲田 3 丁目	27214	45	34° 29′ 29″	135° 35′ 28″	平成21年8月17日~ 平成21年9月30日	316 m²	一般国道(旧)170 号線歩道設置工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
甲田南遺跡	集落跡	弥生~中世	中世墓 古代竪穴建物 弥生土器棺ほか	瓦器、土師器、鉄鎌 弥生土器、磨製石剣 ほか			
要約	中世の遺構としては、木棺墓1基とピット群を確認した。 古代と考えられる竪穴建物2棟を確認した。1棟にはカマドを付設する。 弥生時代の遺構としては、土器棺1基と土坑数基、自然流路などを確認した。						

大阪府埋蔵文化財調査報告2010-8

甲田南遺跡

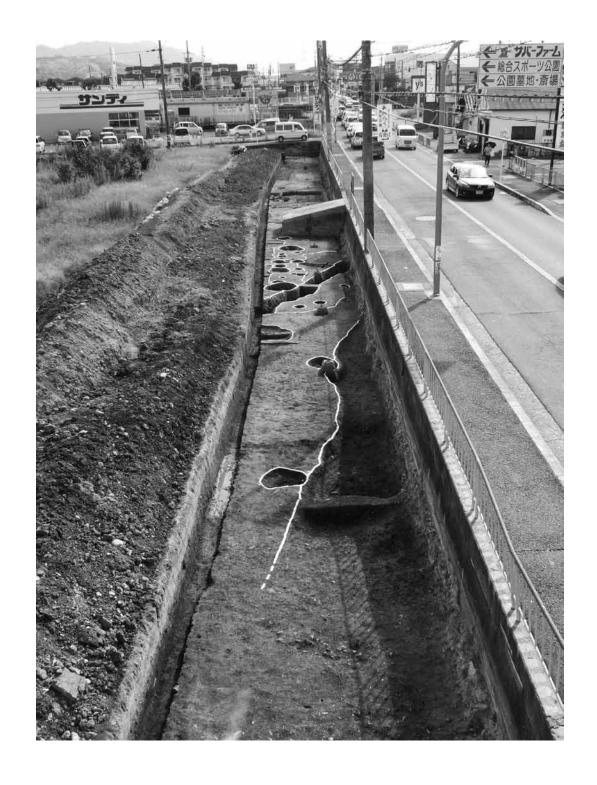
一般国道(旧)170号線歩道設置工事に伴う発掘調査

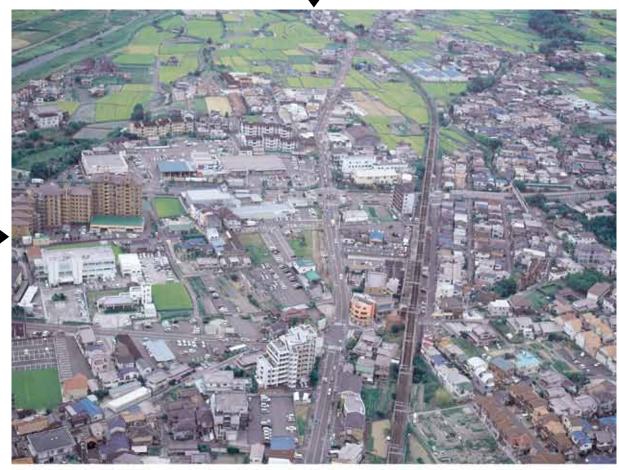
発 行 大阪府教育委員会 〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 平成23年3月31日

印 刷 (株近畿印刷センター 〒582-0001 柏原市本郷 5 丁目 6 番25号

図版





北東上空からみた調査区



南上空からみた調査区



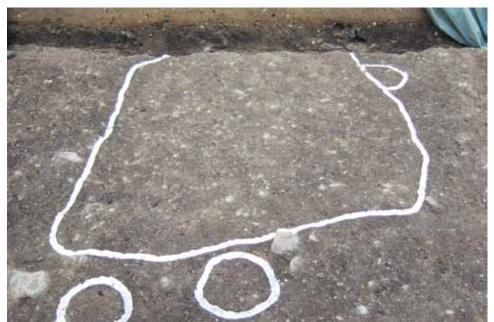
調査区北端部



調査区中央部



調査区南端部



検出状況 (西から)



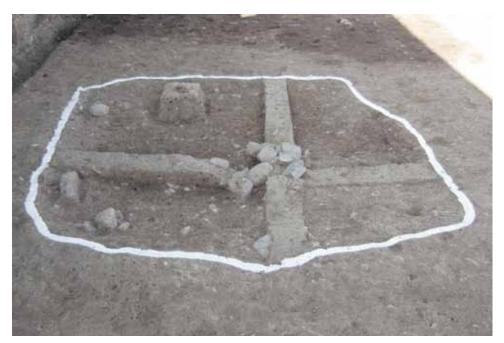
掘削状況 (西から)



墓坑内北東部の遺物出土状況(北西から)



9・10区溝・ピット群(南西から)



土坑02 (南から)



土坑02の塼出土状況 (西から)



竪穴建物01の掘削状況(南西から)



竪穴建物02のカマド検出状況(西から)



竪穴建物02のカマド検出状況(北西から)



カマドの掘削状況1 (西から)



カマドの掘削状況 2 (西から)



カマドの掘削状況3 (西から)



竪穴建物01・02全景(北西から)



周溝とカマドの関係1 (南から)



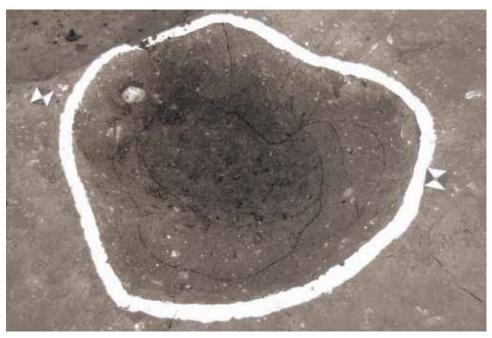
周溝とカマドの関係2 (北から)



掘削状況1 (南から)



掘削状況 2 (南から)



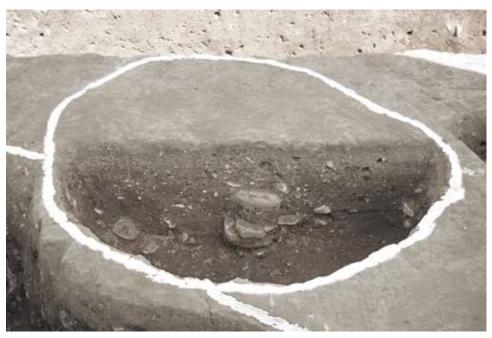
墓坑の掘削状況 (南から)



6・7区の遺構1 (北東から)



6・7区の遺構2 (南西から)



土坑05の掘削状況 (西から)



落込み01の焼土検出状況(南東から)



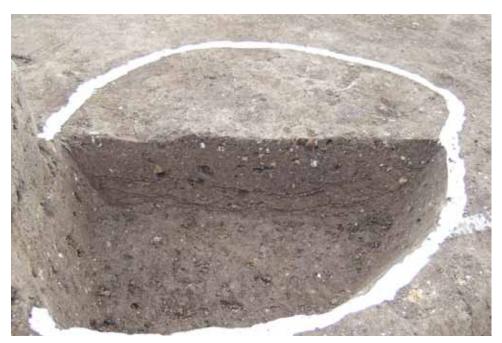
落込み01の焼土掘削状況(南東から)



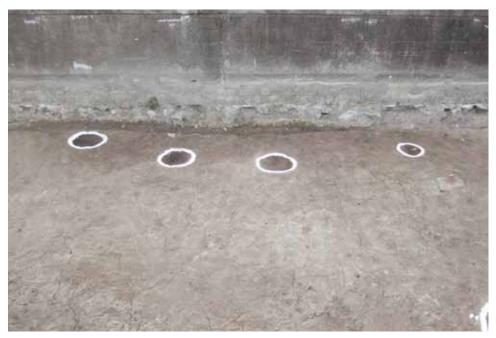
土坑12の掘削状況 (西から)



土坑04掘削状況 (西から)



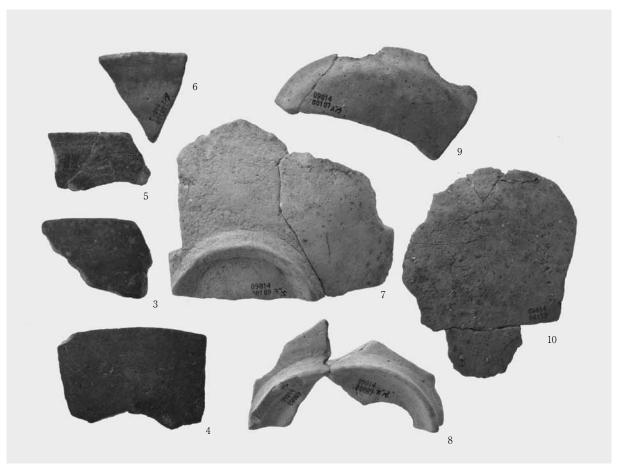
土坑16掘削状況(西から)



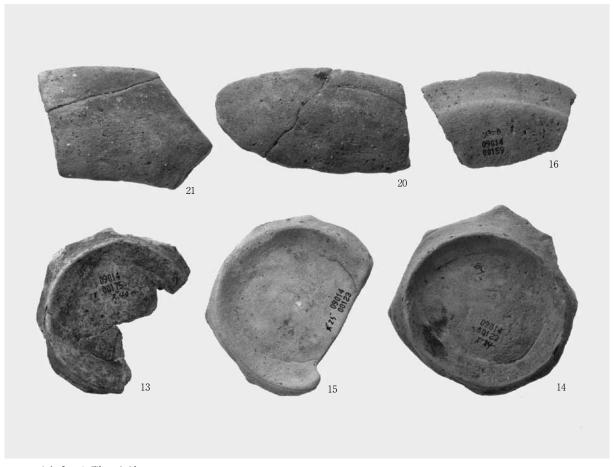
12区ピット群(東から)



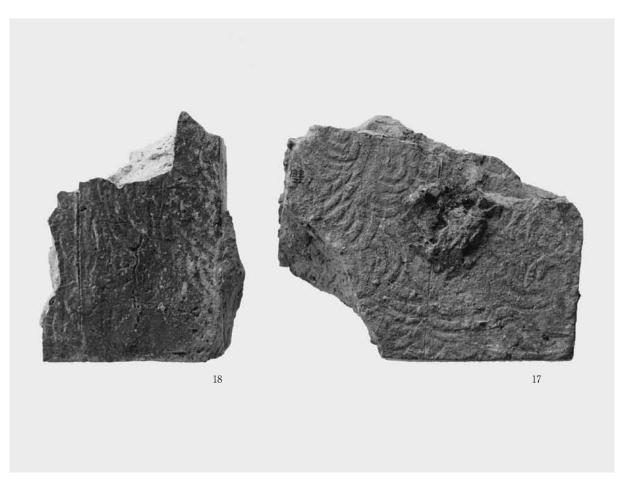
竪穴建物02、溝02、中世墓01(1)



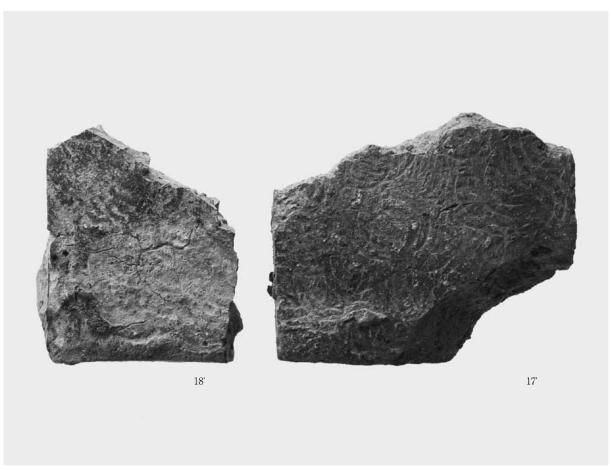
中世墓01 (2)



9・10区ピット群、土坑02



土坑02出土塼 a 面

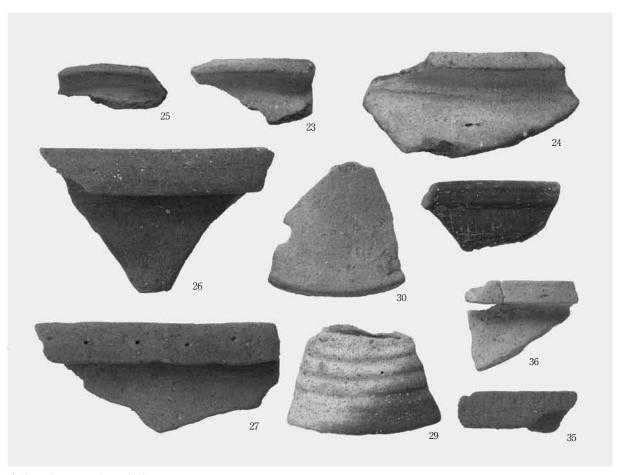


土坑02出土塼 b 面

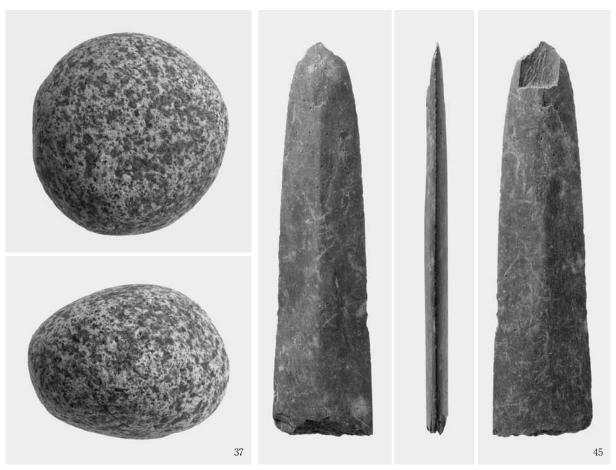




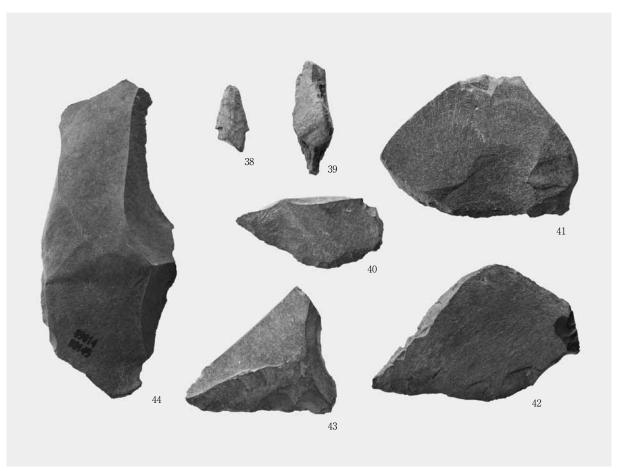
土器棺01身



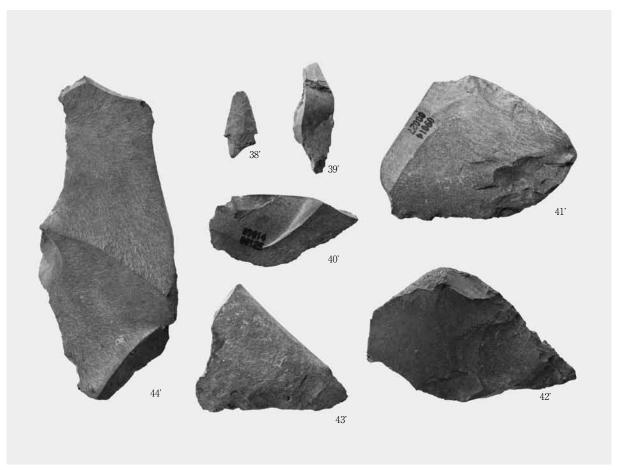
自然流路01、土坑05 (1)



土坑05 (2)、土坑04



出土石器a面



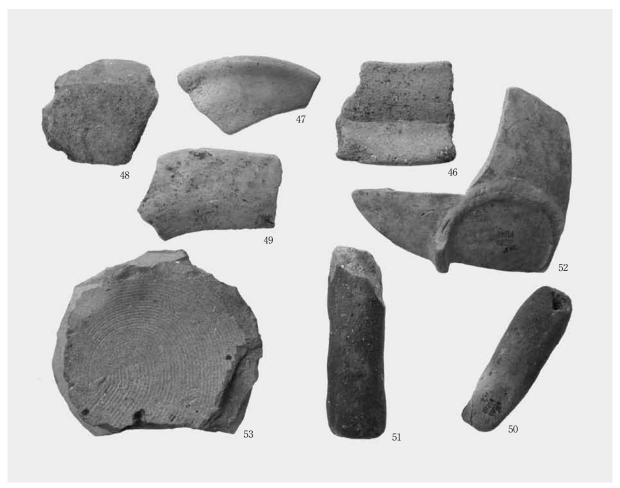
出土石器b面











その他の出土遺物 (1)